

タンチョウ [丹頂、学名 *Grus japonensis*]

分類／ツル目ツル科

分布／日本では北海道の釧路湿原などに留鳥として生息し、多くが一年中同じ場所で生活します。中国東北部やロシア極東地方に分布し、大陸にいる群れは現在も「渡り」（季節ごとに違う場所へ移動すること）を行います。高知県での確認は非常にまれですが、旧中村市内での記録があります。また、国内でも数力所の記録があります。

すがた／全長約140cm。白と黒の体をしており、頭頂部は皮膚が露出して赤く、興奮すると大きくなります。和名のタンチョウ（丹頂）は、丹＝赤い、頂＝頭頂部で、頭のてっぺんが赤いことに由来します。

生態／冬季は人里近くで群れをつくって過ごし、雌雄が向かい合ってジャンプなどの動作を組み合わせた「求愛ダンス」「ツルのダンス」と呼ばれる行動を行います。雑食性で、草の葉や種子、湿原に棲む昆虫や魚、カエルなどを食べます。環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類（VU）、文化庁の特別天然記念物、国内希少野生動植物種（種の保存法、1993年）などに指定され、保護されています。

※参考：「タンチョウ」『フリー百科事典 ウィキペディア (Wikipedia) 日本語版』2009年1月8日（木）10:03 UTC, URL: <http://ja.wikipedia.org>



つるの 雑記帳

地域の人みんなで連携作業

江ノ村地区のねぐら・えさ場で火入れを行いました



火入れの様子

江ノ村地区で、平成20年12月4日午後、ボランティアによる火入れ（草焼き）を行いました。この火入れは、夏場に当会が刈った草を焼き、ツルが降りやすい空間をつくること、また来年度に向けての除草や防虫、土壌の殺菌などを目的として行われました。周囲の安全に気を配りながら少しずつ火を点けていくと、冬の乾いた空気で、火はあっという間に田全体に燃え広がりました。参加した約30名の会員は、すさまじい火の勢いに額に汗をにじませながら作業をしていました。江ノ村地区では、来年度は地元の方々が実際に稲（食用米）を植え、稲刈り後、その二番穂を残すかたちでのねぐら・えさ場整備を進める予定です。人とツルがともに利用することで、共生を図れる試みとなりそうです。

※江ノ村地区でのねぐら・えさ場づくりは、「セブン-イレブンみどりの基金」の助成をいただきながら進めています。



火入れ後のねぐら・えさ場



点火用の道具を準備する会員

ツルを見かけたら

お願い



四万十川および中筋川流域で見られるツルは野鳥です。非常に用心深く常にあたりを警戒しています。特に光や物音に敏感で、一度飛び立つと遠くに飛び去ってしまい1羽も見られなくなります。自然のままのツルの生活をおびやかさないように、静かに遠くから見守って下さい。

四万十つるだよりに関するお問合せ

四万十つるの里づくりの会事務局

〒787-0029 高知県四万十市中村小姓町46 中村商工会議所内
tel:0880-34-4333 / fax:0880-34-1451
mail: naka10@cciweb.or.jp



地域の人みんなで協力しあい、 ツルの越冬を見守っていきましょう

平成20年10月27日、四万十市の上空で飛行するツルが確認されて以来、四万十川および中筋川流域には続々とツルが訪れています。平成21年の元旦には、平成12年度以来8年ぶりにナベヅルの親子（9羽）の越冬が始まり、新聞等でも大きく取り上げられました。

四万十つるの里づくりの会のアドバイザーである澤田佳長氏（野生生物環境研究センター 所長）によると、幼鳥が越冬すると来季も8～9割の確率で同じ越冬地に帰ってくるといわれているため、ツルが北へ帰る3月中旬まで、できるだけ長く当地に居つかせる必要があるとのことでした。

そのために私たちができるのは、警戒心の非常に強いツルを驚かさないように気をつけること。大きな音を立てたり、むやみに近寄らないことが大切です。当会でも、今季最大の72羽のナベヅルが確認された11月6日以降、四万十市内の小中学校や旧中村市内の全世帯へのチラシの配布、啓発看板の増設、新聞やテレビなどを通じた協力呼びかけ等を行い、地域での理解促進に特に力を入れています。



水田に降り、羽を休めるナベヅルの群れ。中央で羽を広げているのが幼鳥



越冬中の9羽のツル（1月）



11月17日の記者発表の様子。四万十市で地域住民主体のツル保護運動が行われていることのPRにもなりました



配布したチラシ



中筋川流域に設置した啓発看板

これまでのツルの飛来状況については中面をチェック!!